

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 27 年 6 月 16 日現在

機関番号：12603

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2013～2014

課題番号：25884018

研究課題名(和文) タガログ語の焦点体系と動詞分類

研究課題名(英文) Focus system and verb classification in Tagalog

研究代表者

長屋 尚典(Nagaya, Naonori)

東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・講師

研究者番号：20625727

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：タガログ語を含むフィリピン諸語は「焦点体系」と呼ばれる世界でもこの地域の言語だけにしか見られない特徴を持っている。本研究課題では、動詞分類すなわち動詞の意味的・形態的グループに注目することによって、この焦点体系に関する諸問題に取り組んだ。その結果、動詞分類に注目することで、ヴォイス現象、項交替現象、重複・反復、移動表現などの諸現象を解明することができた。この動詞分類を用いた言語研究の成果は単にフィリピン諸語の研究および一般言語学に貢献しただけでなく、東京外国語大学を中心とするフィリピン諸語教育でも役に立っている。

研究成果の概要(英文)：Tagalog and other Philippine languages are well known for their complex verbal morphology, often referred to as the focus system. This verbal morphology allows for deriving a variety of verb lexemes from a single verbal base. This project examined Tagalog morphosyntactic phenomena from a perspective of verb classification. The major finding of this project was that semantic classes of verbs play a significant role in analyzing voice phenomena, argument alternations, reduplication and repetition, motion expressions, and other linguistically important phenomena in this language.

研究分野：言語学

キーワード：言語類型論 フィリピン諸語

## 1. 研究開始当初の背景

タガログ語を含むフィリピン諸語には、「焦点体系」と呼ばれる世界でもこの地域の言語だけにしか見られない動詞形態論がある。この体系では一つの語根から複数の動詞が派生される。極めて複雑なヴォイス現象・項交替現象を示すのである。

申請者の考えでは、この動詞形態論に関する従来の研究には、Nagaya (2009, 2012) などの例外を除けば、動詞分類という観点が出ていた。しかし、Levin (1993) による英語の動詞分類の先駆的研究からも明らかのように、ヴォイス現象や項交替現象においては、動詞分類の観点が有効である。そこで本研究では動詞分類という観点から、焦点体系およびそれに関連する諸現象の分析に取り組んだ。

Levin, Beth 1993. *English Verb Classes and Alternations. A Preliminary Investigation*. Chicago: University of Chicago Press.

Nagaya, Naonori. 2009. The middle voice in Tagalog. *Journal of the Southeast Asian Linguistics Society* 1:159-188.

Nagaya, Naonori. 2012. On the syntactic transitivity of Tagalog Actor-Focus constructions. *NINJAL Research Papers* 4: 49-76.

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、動詞分類が焦点体系による動詞派生をどのように制限し、ヴォイス現象・項交替現象にどう影響するのかを解明することである。

もちろん「動詞分類」と言っても様々な動詞の分類が考えられるが、本研究で想定する動詞分類は、大きく分けて、(i) 動詞語根の意味的クラス、および (ii) 動詞語根の形態論的クラスである。この二つの動詞分類を設定し、その観点からヴォイス現象などタガログ語の諸現象を分析していくのである。具体的には、500 個の語根を選定し、その語根についてフィールド調査でデータを収集し、データベースを構築することで研究を進める。

## 3. 研究の方法

本研究計画は主に二つの段階からなっている。第一に、文献調査を踏まえて調査すべき 500 個の語根を選定する段階である。第二に、選定された 500 個の語根についてフィールド調査でデータを収集し、データベースを構築する段階である。

平成 25 年度は、文献調査と調査語根選定を中心に行った。まず、ヴォイス現象、項交替現象や動詞分類に関する研究を参照し、どのような意味的観点からの動詞分類が有効であるか検討し、調査対象とする語根を選定した。そのうえで、平成 26 年 3 月に短期フィールドワークを行い、いくつかの語根に関するデータを収集した。さらに、データベース構築にむけてどのようなデータベースにするのがよいか検討を行った。

平成 26 年度は、平成 25 年度に行った基礎的調査に基づいて、フィリピンでフィールド調査を行い、データを収集した。3 人の言語コンサルタントの補助のもと、選定した語根に関連する項交替現象やヴォイス現象の形式と意味について集中的に調査した。

その上で、収集したデータを整理し、データベース化を試みた。タガログ語の辞書データも補助的に利用することでデータベースのサイズを大きくした。

## 4. 研究成果

以上の研究の結果、タガログ語の以下の諸現象について動詞分類の観点が有効であることがわかった。

### (1) pa-分詞

タガログ語には pa-分詞と呼ばれる形式があり、いくつかの用法があることが知られているが、どのような語根がどのような意味を表現するかについては研究がなかった。

そこで本研究では動詞分類の観点からこの pa-分詞の用法の整理を行った。たとえば、pa-分詞が方向「～の方へ」を表現できるのは経路情報を表現する語根が pa-分詞となったときのみである。一見、規則性のないようにみえる pa-にまつわる現象も、動詞分類の観点から考えると統一的な観点から理解することができるのである。

### (2) 移動表現

移動に関わる意味的要素は一般に様態、経路、および直示に分類される。どの意味的要素がどのような形式によって表現されるかは言語ごとに大きく異なる。タガログ語はこの点でも興味深く、様態も経路も直示も全て動詞あるいは pa-分詞で表現することができる。つまり、理論的には、この言語は、移動を表現する際に形式の選択の幅が極めて広い言語であるといえる。

本研究ではこのタガログ語の移動表現について実験的調査を行い、実際の移動表現の選択の幅は限定的であることを明らかにした。すなわち、第一に、直示情報が動詞で表現されることは（理屈上はありうるが）実際にはほとんどない。pa-分詞で表現する。第二に、様態と経路については、どちらも動詞として出現することはできるが、どちらが

動詞になるかには傾向があることがわかった。つまり、「その状況においてもっとも有標的で際立った情報が動詞として実現する」という傾向があることが分かったのである。

このように移動表現を考える際にも、動詞の意味クラスに注目することが重要なのである。

### (3) 重複と反復

タガログ語には語以下のレベルでの要素の繰り返しである重複と句レベルでの要素の繰り返しである反復の二つの繰り返し現象があり、一般言語学的に注目を受けている。

この研究では、このうち重複について動詞分類の観点の有効であることを明らかにした。すなわち、重複がどのような意味を表現するかは動詞の意味的クラスによって異なる。たとえば、重複によって行為の繰り返しを表現できる語根は限られており、状態変化を伴わない行為を表現する語根のみである。

### (4) naka-結果状態構文

タガログ語には接頭辞 naka-をとる結果状態述語が存在する。この言語はヴォイス現象の研究がきわめて盛んな言語であるが、結果状態述語についてはほとんど研究がなかった。

本研究課題ではヴォイス現象のひとつとしてこの naka-結果状態構文の研究に取り組み、この構文の記述に動詞分類の観点の有効であることを指摘した。すなわち、この naka-結果状態構文によって表現される結果状態とはどのようなものであってもよいわけではない。実際には、naka-は位置変化や表情、衣服、姿勢など可逆的な変化を表現する語根とのみ共起する。一方で、不可逆的な状態変化を表現する語根とは共起できない。動詞分類に注目しなければできなかった発見である。

### (5) タガログ語語根データベース

本研究課題の成果はタガログ語語根データベースとして結実した。語根の意味クラスと形態論的クラスおよびその派生に関するデータベースである。このデータベースは(1)から(4)の研究成果の土台となっただけでなく、(7)のタガログ語教育のためにも利用している。

このようにタガログ語の諸現象の記述・説明において動詞分類が有効であることが確かめられたが、この研究課題で確立した研究方法を利用して同じオーストロネシア語族に属するものの、その類型論的特徴が大きく異なるラマホロット語も分析した。

### (6) ラマホロット語の複他動詞構文

インドネシア東部フローレス島で話されているラマホロット語には二重目的語構造を持つ二つの複他動詞構文がある。ひとつは

「与える」「送る」などの動詞によって形成される GIVE 型構文であり、この構文は前置詞 ia を用いた前置詞目的語構文と交替する。一方で、「料理する」「買う」などの動詞によって形成される BUY 型構文もあり、こちらは「与える」という意味の動詞を用いた動詞連続構文と交替する。両者は用いられる動詞が異なるだけでなく、関係節化などの諸文法現象でも異なる性質を示す。

この現象について、本研究課題の注目する動詞分類の観点を用いて分析したところ、二つの構文の違いは関与する動詞の意味クラスの違いに帰結することが判明した。すなわち、GIVE 型構文に関与する動詞は単に物体の所有権の移動を意味するだけなのに対して、BUY 型構文に関与する動詞は所有権の移動だけでなく「~のために」「~のかわりに」という受益の意味も必ず含んでいることが明らかになったのである。

さらに、これらの研究成果を東京外国語大学におけるタガログ語教育に役立てた。

### (7) 動詞分類を利用した教材開発

動詞分類の考え方およびそれに関連する現象の分析を実際のタガログ語教育にも活かし、動詞分類の有効性を確認するとともに、実際の教育で実践した。たとえば、今回の(1)や(4)の成果は市販の学習書ではほとんど説明がなされていないが、動詞分類の観点をもち込むと簡単に説明ができる。

こうして本研究課題は、語根に注目した動詞分類という方法が、タガログ語を含むオーストロネシア語族の研究において重要な役割を果たすことを実証的に明らかにした。この点で意義が大きく重要である。

将来的には、(5)で示したデータベースに基づいて発展的な研究を行うと同時に、データベースを広く一般に公開し、一般のタガログ語学習者およびフィリピン人の日本語学習者にその研究成果を還元したいと考えている。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 6 件)

Nagaya, Naonori. 2014. Notes on Stand-Alone Yung-Nominalizations in Tagalog. Tokyo University Linguistic Papers 35: 177-186. (査読あり)

Nagaya, Naonori. 2014. Ditransitives and benefactives in Lamaholot. In: Argument Realisations and Related Constructions in Austronesian Languages:

Papers from 12-ICAL, Volume 2, edited by I Wayan Arka and N. L. K. Mas Indrawati, 227-245. Canberra: Asia-Pacific Linguistics. (査読あり)

長屋尚典. 2014. タガログ語の措定文と指定文. 東京外国語大学論集 88: 117-143. (査読なし)

長屋尚典. 2014. ラマホロット語の空間参照枠: ヌリ村における実験から. KLS Proceedings 34: 193-204. (査読なし)

Nagaya, Naonori. 2013. Voice and grammatical relations in Lamaholot of eastern Indonesia. Alexander Adelaar (ed.), More on voice in languages of Indonesia. NUSA 54:85-119. (査読あり)

Nagaya, Naonori and David Moeljadi. 2013. Five levels in Indonesian. Tasaku Tsunoda (ed.), Five Levels in Clause Linkage, Volume 1, 281-303. Tsukuba, Ibaraki: Tasaku Tsunoda. (査読なし)

〔学会発表〕(計 8 件)

長屋尚典. 2015. タガログ語の naka- 結果状態構文. 日本言語学会第 150 回大会, 大東文化大学, 神戸, 2015 年 6 月 20-21 日.

Nagaya, Naonori. 2015. Expressing motion events without deictic motion verbs: The case of Tagalog. NINJAL International Symposium: Typology and Cognition in Motion Event Descriptions, National Institute for Japanese Language and Linguistics, Tachikawa, Japan, January 24-25, 2015.

Yo Matsumoto, Fabiana Andreani, Anna Bordilovskaya, Monica Kahumburu, Naonori Nagaya, Ryosuke Takahashi, Yuki-Shige Tamura, and Yuko Yoshinari. 2015. Path coding with or without manner specification: A cross linguistic study. NINJAL International Symposium: Typology and Cognition in Motion Event Descriptions, National Institute for Japanese Language and Linguistics, Tachikawa, Japan, January 24-25, 2015.

長屋尚典. 2014. タガログ語の pa- 形. 第 148 回日本言語学会, 法政大学, 2014 年 6 月 7-8 日.

長屋尚典. 2014. タガログ語の重複と反復の形式と意味. 第 149 回日本言語学会, 愛媛大学, 2014 年 11 月 15-16 日.

Nagaya, Naonori. 2014. Pragmatic functions of ano 'what' in Tagalog. Second International Conference on the American Pragmatics Association, UCLA, Los Angeles, USA, October 17-19, 2014.

Nagaya, Naonori. 2014. Demonstratives and directionals in Lamaholot. Seventh Austronesian and Papuan Languages and Linguistics conference, SOAS, London, U.K., May 16-17, 2014.

長屋尚典. 2013. タガログ語の動詞接辞 ma- の多義性: 自発、意図成就、可能、受身. 日本言語学会第 147 回大会, 神戸市外国語大学, 神戸, 2013 年 11 月 23-24 日.

〔図書〕(計 1 件)

Mikio Giriko, Naonori Nagaya, Akiko Takemura, and Timothy J. Vance (eds.) 2015. Japanese/Korean Linguistics, Volume 22. CSLI Publications, 400 pages.

〔産業財産権〕  
出願状況 (計 件)

名称:  
発明者:  
権利者:  
種類:  
番号:  
出願年月日:  
国内外の別:

取得状況 (計 件)

名称:  
発明者:  
権利者:  
種類:  
番号:  
出願年月日:  
取得年月日:  
国内外の別:

〔その他〕

Nagaya, Naonori. 2014. Grammar ng pag-uulit sa Tagalog, University of the Philippines, Diliman, Quezon City, Philippines, August 22, 2014. (海外大学向けアウトリーチ活動)

長屋尚典. 2014. 「フィリピンの言葉は繰り返す」, 東京外国語大学オープンアカデミー「言葉とその周辺をきわめる 3」(第 4 回, 語学研究所主催). 東京外国語大学本郷サテライト, 2014 年 10 月 28 日. (一般向けアウトリーチ活動)

長屋尚典. 2013. 東インドネシアのラマ  
ホロット語: 「右」も「左」も分からない人々  
のことばと暮らし. ことばのサロン, NPO 法  
人地球ことば村, 慶應義塾大学, 三田, 2013  
年 10 月 26 日. (一般向けアウトリーチ活動)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

長屋 尚典 (Naonori Nagaya)

東京外国語大学・大学院総合国際学研  
究院・講師

研究者番号: 20625727

(2) 研究分担者

( )

研究者番号:

(3) 連携研究者

( )

研究者番号: